

て結んでゐる。

以上本書の概要を述べたが他の二石標よりもこれ等は偉大にして華々しきは考古學者としてのそれであり、支那史前文化の研究を彩陶文化に集中せしめた教授の業績が遺憾なくかゞひ得るのである。而して教授は所謂仰韶文明に原支那文化の淵源を求めながら、殷文化との間隙は如何とも埋める術がなかつたものと思はれる。爾來今日まで教授の見解は根強く存続し來たつたが、右の間隙を埋めたものは國立中央研究院の支那考古學者の手による彩陶文化と異質的な黑陶文化の解明によつてゐあつた。

尙本譯書には各章毎に懇切な譯註があり譯者の良心的努力は察して餘りがある。終に一二氣附いた點を訂正して置かう。二六五頁の譯註に擧げられた彩陶遺跡中「涇河北岸の侯家莊」とあるは勿論「涇河南岸の後岡」である。二九二頁の「アヴェバリ」は Lord Avebury のこと、「エブリー卿」とすべきである。二九九頁の「この住居址で發見された無彩の粗雑な土器の多くは明らかに靡或は手織片で型取られてゐた」とある一句は不明瞭であるが要するに細麻文を印した土器のことを云つたものである。(座右寶刊行會刊・定價六圓參拾錢)(澄田正一)

日本考古學研究

森本 六 爾著

著者の七周忌記念に編まれた遺稿集で、故人の主筆した『考古學』其他の雜誌單行本などに發表された大小三十餘の論文及未發表の「銅劍銅鈿の研究」を收録し卷末には略歴及著作目錄が附せら

れてゐて、其の學問的領域、傾向等をよく示すものである。卷頭の「手帖」は極く短かいものながら含蓄の深い文章で、自ら襟を正して讀ましむる所があり——熱のある日尙十五年の齡を重ねて見たいと思ふ。——なる句に多くの人の感銘をよぶであらう。

さて著者が生前最も意を用ゐ又得意とした研究對象は青銅器の問題である。よしや我國に青銅器時代を認めようとする、その提唱は破れたとしても、此處に彼の日本古代文化論述の基調が置かれて居ることは注意せらる可きであり。北九州の一角に傳へられた金屬を伴ふ高度文化が「西南より東北へ」とその力強い歩みを日本全島に及ぼしたと云ふ考へは動かないであらう。その典型的な論述は「銅劍銅鈿の研究」に見られるばかりでなく、彌生式系統の文化は勿論、日本古代文化全般を論じた「日本古代生活」にも現はれてゐる。青銅器の分類、編年は此の觀點から行はれ、分布から傳播の狀況も鮮かに解明されてゐる。而して古代文化の流動が巧みに把握されてゐる手際に感服する。たゞし、その間にもすれば見失はれ易い一面のあるのを忘れ得ない。例へば同じ青銅器であり乍ら一方では劍であり鈿であるものが、他の一方に行けば銅鐸となるのは何故であるか、青銅器と共に彌生式の文化が北九州で始まつて居るのに、何故半島と土器がうまくつながらぬのか。此等の問題に就いて觸れる所のないのは物のたりない氣がする。

次に青銅器の問題を彌生式土器と結びつけ、廣く生活樣式の問題迄掘り下げた所に著者の非常な強味がある。右の見地から石廂

丁農具説、土器の貯藏型と煮沸型、聚落立地の問題、原始繪畫による生活共同態の把握、土器と銅鐸の文様比較、有角石斧を石劍の模倣なりとなす等多くのすぐれた見解が組立てられて居るのは本書に於いてまさに注意すべき部分としよ。

本書に收められた古墳關係の諸編は初期古墳の副葬品個々に關するものが多い、そして『川柳村將軍塚』『金鍔山古墳』等單行本から描出されたものであるが爲に、青銅器研究の如くには完成の域に達して居らない様に見える。然し此處でも埴輪の石人石馬起源説の如き問題となるべきもの、鈴鏡による動的文化論、聖德太子磯長御廟とエンタシスを論じたもの等着眼の凡ならざる諸篇が見られる。

以上の諸篇は何れも當時の學界に清新な波紋を投じたものであり、敏感な時代感覺を備へ、常に新しい問題の所在を示さうと努力した著者の面目を今日に傳ふるものとして、今更ながらその早世がおしまれるのである。(桑名文星堂發行・A5判・六五〇頁・定價一〇圓) (今井富士雄)

### 東洋美術論考

矢代幸雄著

留學に出張に、九年にも近い日を歐米諸國に過ごした著者であるので、自らその間東洋美術の精華を目睹する機會にめぐまれた而してその度毎著者をとらへたものは遠く祖國を離れた名作に對する愛惜の情と、それらに對する彼地人士の未熟な理解に對する寂寞感とであつた。かくて著者は、一方永久に祖國を去つた名品

の面影を出来る限り正確に故國に傳へんがために最近の寫眞を得ると共に精確なる調査を行ひ、又他方に於いて祖國が、一東洋が世界の舞臺に送つた代表者をよりよく理解せしめ、その上に示された東洋の美の本質を世界に問ひ萬民の喜びとするの念願を以て觀察に志念したのであつた。本書はさうした著者の發表論文、中支那に關するもの八篇、我國美術關係のもの八篇を選んで一書となし、別に附圖一冊に精良なコロタイプ圖版五十五葉を收めたものである。

既に西洋美術に造詣の深い著者が天龍山の浮彫飛天や隋の開皇阿彌陀佛をはじめ、唐の名作三點を論ぜられた初頭の四篇は、そのまゝに一の支那佛教彫刻史であつて、そこには線藝術の極まる處、それが自らの内的要求と佛教なる外的要素の受容によつて如何に、又如何なる美を展開して行つたかが、説かれると共にまたそこに何を見るべきかについて教ふるものがある。次の四篇は支那繪畫史中見逃す事の出来ない徽宗摹張萱搗練圖や宋摹周文矩宮中圖等に關する論文であつて、宋朝畫卷に見る麗麗な著彩や全く神經の行き届いた線藝術の粹が、取り上げられ明かにされてゐる。次に日本關係のものとしては最初に快慶と西智との有銘二彫刻が紹介され、續いて大威徳明王圖と寶樓閣曼荼羅、法華堂曼陀羅等藤朝佛畫の名作が論述せられてゐる。その最後のものはそれが珍海の畫風を示す希有の資料たるのみならず、その下圖が天平の氣格を帯びたとする所から所論は自ら唐と天平、並びに藤原美術に及んで興味深きものがある。次は鎌倉期繪卷物の傑作「吉備